

梵文『菩薩藏經』と漢藏訳本

象 本

〔抄 録〕

本稿では、經典名、梵文写本の内容、諸本間の異同という三点から、『菩薩藏經』梵漢藏四本の関係について考察した。その結果、梵文および漢藏四本の經典名から、本經が「菩薩藏」を説く經典であることが分かった。また、梵文写本にのみ存在する内容、前四品および後二品における異同から、四本は別本であることが判明した。また、上記六品の異同、特にその中、第十一品における道法（分）善巧の異同および第十二品における四摂法中の布施の異同から、玄奘訳以外の三本は近い系統に属するものであることが推測されるが、玄奘訳が使った梵文原典は、ポタラ宮に保存されている梵文写本、さらに法護等訳が使った梵文原典、藏文訳が使った梵文原典の三本より古層に属するものであることも明らかにした。同時に、「慈悲喜捨品」中、梵文写本、法護等訳にのみ存在する内容があることから、梵文写本、法護等訳が使った梵文原典は他の二訳が使った梵文原典より新層に属するものであると判明した。また、「菩薩觀察品」等の五品にのみ存在する内容があることから、このポタラ宮に保存されている梵文写本は法護等訳が使った梵文原典よりもっと新層に属するものであると判明した。

キーワード 菩薩藏經、梵文写本、玄奘、法護、道法善巧

一、はじめに

筆者は『菩薩藏經 (Bodhisattvapiṭaka-sūtra)』について、梵文原典と二本の漢訳および藏訳との比較研究を行っている。本稿で用いる『菩薩藏經』の梵文テキストは、オスロ大学のイエンス・ブロールヴィック (Jens Braarvig) 教授や佛教大学の松田和信教授らによって梵文写本⁽¹⁾の写真から校訂されたものであるが、現時点では未出版である。筆者は両教授より提供された出版前の梵文テキストを用いて、經典名、梵文写本にのみ存在する内容、梵漢藏四本間の異同という三つの視点から、梵漢藏四本間の関係を考察する。

二、諸本の関係

1. 經典名

本經の經典名については、梵文写本の末尾に bodhisatvapiṭakaṃ nāma dharmaparyāyaṃ mahāyānasūtraṃ samāptam（菩薩藏と名付ける法門である大乘經完了, MS142a3）と書かれていることから判断すれば、梵文写本では、本經の經典名は bodhisatvapiṭaka-dharmaparyāya（菩薩藏法門）であることが分かる。また、漢訳には『大宝積經』第十二会に編入された「菩薩藏会」（玄奘〈602-664年〉訳）と、『佛說大乘菩薩藏正法經』（法護〈980-1058年〉と惟浄〈973-1051年〉との共訳）が存する。その中、智昇『開元釈教録』（730年）卷八の「『大菩薩藏經』二十卷、見内典録。今編入寶積、當第十二會。貞觀十九年五月二日、於西京弘福寺翻經院譯至九月二日、畢沙門智證筆受、道宣證文⁽²⁾」という記述によれば、「菩薩藏会」は『大宝積經』に編入される前に、『大菩薩藏經』と呼ばれていた。『開元釈教録』のほか、静泰『衆經目錄』卷一⁽³⁾、道宣〈596-667年〉『大唐内典録』（664年）卷六⁽⁴⁾および『統高僧伝』卷四⁽⁵⁾、靖邁〈627-?年〉『古今訳経図記』卷四⁽⁶⁾、明佺等『大周刊定衆經目錄』卷五⁽⁷⁾等の經録あるいは伝記から、『大菩薩藏經』は二十卷であり、貞觀十九年に弘福寺で玄奘によって翻訳されたものであることが分かる。また、『統高僧伝』卷四の「其年〔貞觀十九年〕五月、創開翻譯『大菩薩藏經』二十卷」という記述から、『大菩薩藏經』は玄奘が印度留学から帰国後の初訳業である經典であることも分かる。また、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷六中の関する記述から、『菩薩藏經』という經名の經典の訳者、訳された年代と場所等は『大菩薩藏經』と一致していることが分かる。その記述は次の通りである。

「貞觀十九年……法師自洛陽還至長安、即居弘福寺將事翻譯。……丁卯、法師方操貝葉、開演梵文、創譯『菩薩藏經』、『佛地經』、『六門陀羅尼經』、『顯揚聖教論』等四部。其翻『六門經』當日了、『佛地經』至辛巳了、『菩薩藏經』、『顯揚論』等歲暮方訖。」⁽⁸⁾

上記から、『菩薩藏經』という經名の經典が玄奘によって貞觀十九年（645）に弘福寺で訳されたものが分かる。そして、その中の「丁卯、法師方操貝葉、開演梵文、創譯『菩薩藏經』」という記述から、『菩薩藏經』は玄奘が帰国後の初訳業であることも分かる。従って、『菩薩藏經』は『大菩薩藏經』とは同一の經典であることが推測される。

また、以上の記述中、言及される諸經と『大乘阿毘達磨雜集論』及び『瑜伽師地論』の翻訳が終わって玄奘が自分の翻訳した經典を皇帝に呈上する「進經論等表⁽⁹⁾」中、「名曰『大菩薩藏經』二十卷」という記述から、『大菩薩藏經』とは『菩薩藏經』の別称であることが明らかになる。その記述の詳細は次のようである。

「二十年春正月甲子。又譯『大乘阿毘達磨雜集論』。至二月訖。又譯『瑜伽師地論』。秋七月辛卯、法師進新譯經論現了者。表曰。沙門玄奘言。……唯玄奘輕生獨逢明聖。所將經論咸得奏聞。蒙陛下崇重聖言賜使翻譯。比與義學諸僧等。專精夙夜不墮寸陰。雖握管淹時未

遂終訖。已絶筆者見得五部五十八卷。名曰『大菩薩藏經』二十卷。『佛地經』一卷。『六門陀羅尼經』一卷。『顯揚聖教論』二十卷。『大乘阿毘達磨雜集論』一十六卷勒成八帙。」⁽¹⁰⁾

また、その呈上した經典に対して、「文武聖皇帝。又讀法師所進『菩薩藏經』美之。因勅春宮作其經後序⁽¹¹⁾」という記述もある。故に、貞觀二十年（646）秋、玄奘が「進經論等表」中、翻訳し終わった『菩薩藏經』を『大菩薩藏經』と呼んだことが分かる。そして、その巻数は二十卷であることも言及されている。また、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻三では、玄奘が印度遊学中に『菩薩藏經』を手に入れたことが詳しく述べられている⁽¹²⁾。さらに『開元釈教録』巻九に『大菩薩藏經』は玄奘によって印度遊学中に入手されて将来されたことも述べられている⁽¹³⁾。さらに『続高僧伝』に記述された『大菩薩藏經』が玄奘によって印度から帰国後、最初に訳された經典であること、および『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻六に記述された『菩薩藏經』が玄奘によって印度から帰国後の初訳として訳された經典であることを併わせてみれば、『大菩薩藏經』は『菩薩藏經』と同一であることは間違いないであろう。

なお、ここで言及した諸経録に『大菩薩藏經』と記述されているが、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』のほか、北宋・道誠『釈氏要覧⁽¹⁴⁾』、元・劉謐『三教平心論⁽¹⁵⁾』に『菩薩藏經』と記述されている事例もある。

『菩薩藏經』が『大菩薩藏經』と呼ばれていた原因は不明であるが、玄奘訳『菩薩藏經』（二十卷）の前に、鳩摩羅什〈344-413年/350-409年〉訳『菩薩藏經』（三卷）と僧伽婆羅〈459-524年〉訳『菩薩藏經』（一卷）が既に存在していることは事実である。前二訳の『菩薩藏經』と区別するために、玄奘らは貞觀十九年に訳された『菩薩藏經』を『大菩薩藏經』と呼んだと筆者は推測している。単なる巻数から見れば、玄奘訳『菩薩藏經』は他の二者よりかなり多いからである。また、『大宝積經』は菩提流志によって唐の神竜二年（706）から先天二年（714）に至る九年間で完成されたものであるから⁽¹⁶⁾、唐の貞觀十九年に玄奘によって翻訳された『大菩薩藏經』は「菩薩藏會」として『大宝積經』に編入される迄に、少なくとも半世紀程度、単独經典として流通していたことになる。

なお、『佛說大乘菩薩藏正法經』については、『閱藏知津』巻三に、「『佛說大乘菩薩藏正法經』（四十卷、今作二十卷）、（南辞安北如松）宋中印土沙門法護等訳、即第十二「菩薩藏會」異譯⁽¹⁷⁾」という記述がある。即ち、智旭〈1599-1655年〉は『佛說大乘菩薩藏正法經』が玄奘訳『菩薩藏會』の異訳であると述べているのである。その他、基弁〈1722-1792年〉も『佛說大乘菩薩藏正法經』は『宝積經』第十二「菩薩藏會」の「同本異譯」であると述べている⁽¹⁸⁾。また、湛慧〈1676-1747年〉の『成唯識論述記集成編』巻四に「佛説」の語を取り去って、經典名を『大乘菩薩藏正法經』としたことが述べられている⁽¹⁹⁾。

また、藏文訳では *'phags pa byang chub sems dpa' sde snod ces bya ba theg pa chen po'i mdo*（聖なる菩薩の藏と呼ばれる大乘の經）と經典を訳しているが、本經は Surendrabodhi, Śilendrabodhi, Dharmatāśīla の三人による共訳であり、宝積經（北京 No.760）に収められ

ている。また、本訳は『デンカルマ目録』と『パンタン目録』の両者に記載されているので、9世紀前半には既に訳されたものと見られる。

以上の經典名を表で示すと、次のようになる。

經典名			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
bodhisatvapiṭaka-dharmaparyāya	菩薩藏經/ 大菩薩藏經/ 菩薩藏会（『大宝積經』の第十二会）	佛說大乘菩薩藏 正法經/大乘菩薩 藏正法經	འཕགས་པ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ལྷན་ཅིག་པ་ཆེན་པོའི་མཛོད། （聖なる菩薩の藏と呼ばれる大乘の經）

以上四本中、梵文写本と玄奘訳が一致、あるいはほぼ一致して「菩薩藏」という經名で本經を呼んでいることが分かる。また、法護等訳と藏文訳では「菩薩藏」を中心の語として經典名を立てることも分かる。要するに、四本それぞれの經典名から、本經は「菩薩藏」を説く經典であることが見て取れる。

次に、菩薩藏經の梵文写本にのみ存在する内容から、梵文写本と諸訳本の関係について考察したい。

2. 梵文写本にのみ存在する内容

『菩薩藏經』の全十二品⁽²⁰⁾中、梵文写本にのみ存在する内容が認められるのは第三「菩薩觀察品 (Bodhisattvapariṅśā-parivarta)」⁽²¹⁾、第五「慈悲喜捨品 (Maitrikaruṇāmuditopekṣā-parivarta)」⁽²²⁾、第八「忍辱波羅蜜多品 (Kṣāntipāramitā-parivarta)」⁽²³⁾、第十「静慮波羅蜜多品 (Dhyānapāramitā-parivarta)」⁽²⁴⁾、第十二「大自在天授記品」⁽²⁵⁾の五品である。それらを一品ずつ紹介したい。

まず、「菩薩觀察品」では、「katibhir bhagavan dharmmaiḥ samanvāgatā bodhisatvā mahāsattvā …… bhūmibhūmyākramaṇakuśalāś ca bhavanti anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair nāyakabhūtā vināyakabhūtā …… bhavanti（世尊よ！菩薩摩訶薩たちは何れ程の諸法を備えれば、……地から地に登ることに対する善巧を持つ者となるのか、世間諸法によって汚されたことのない者となるのか、指導者となるのか、調伏者となるのか、……）」という舍利弗が世尊に質問する箇所がある。その中、「anupalīptāś ca bhavanti lokadharmair（世間諸法によって汚されたことのない者となるのか）」という内容は梵文写本にのみ存在する。それを表「3. 異同」（1）で示す。

次に、「忍辱波羅蜜多品」中、菩薩は、破戒し、惡法を持ち、多くの貪嗔痴を持ち、頑固であり、教化し難い衆生たちを利益する具体的な例を挙げる箇所、即ち、修行の最後時、命が尽きた根を持つ菩薩が一口だけ肉を手に入れることができた時に、その自分の命にかかる食物である一口の肉を、飢え渴いた人に乞われた時に、菩薩はその人の樂受のために、一口の肉を乞いて来る人に与えたという話と、その話の直後にある28項の偈文を説く箇所である。その箇所⁽²⁶⁾は次の表で示す⁽²⁷⁾。

忍辱波羅蜜多品			
梵文写本 (和訳)	玄奘訳	法護訳	藏文訳
①、舍利弗よ！もし菩薩が無上正等菩提に向かっているとすると、そして彼〔菩薩〕は一つの一口の肉が手に入ったとする、その時、或る飢え渴いた人がやって来て、彼は彼〔菩薩〕に一口の肉を乞いたい、このように言うことでしょう。 「私に一口の肉を与える人、その人のすべての前世になした善根は失われる、そして〔その人は世に〕現れた千仏を避けて、百千劫の間、大地獄で苦しめられる。」 舍利弗よ！そこで、菩薩はその人に善く適確に訊ねるべきである。 「おお！人よ！それらの苦しみに留まることが聞かれた。しかしながら、この一口の肉が手に入れば、あなたには多少の楽受が生じるであろう。」 もし〔その人はこのように〕言うならば、「私には楽受が生じてほしい。」 そこで、愉快な心を持ち、懈怠のない心によって精勤を持ち、厭のない心を持ち、障碍のない心を持ち、不浄とケチを離れた心を持つ菩薩によって、その人にその一口の肉が与えられるべきである。それは何故か。自分に苦しみがあれば！この人には楽受があれば！なぜならば、私によってすべての衆生が楽になるべきであるから。そして、我々 ⁽²⁸⁾ こそが直ちに目の前にいる人を楽にすべきである。舍利弗よ！これが菩薩たちの無量悲の法であって、戒の守りに導き、そして、菩提の獲得に導くのである。 その時、世尊は直ちに次の諸偈を説いた。(MS83a2-5)	なし	なし	なし
②、過去の諸々の有趣中、勝者には本生がある、 〔彼は〕比丘僧〔団〕の中に獅子のようなものとして輝いている。(MS83a5)	なし	なし	なし
③、その時に、諸修行によって清浄された仙人は行境にとどまっていて、山の深い〔ところに〕住んでいて、持戒にて梵行を行っている。(MS83a5-6)	なし	なし	なし
④、彼〔勝者〕には、カリの詐偽と魔の悪意によって、 罵詈のために、五百の人たちによって言われたことがある。	なし	なし	なし
⑤、また、彼ら〔五百の人たち〕は常に中断なしに彼の背後から付き纏う。 彼らは夜と昼に仙人に真逆さまに (avāg) 諸々の不快を感じさせる〔言葉〕を言う。	なし	なし	なし
⑥、立っている間にも、座っている間に〔も〕、経行している間に〔も〕、眠っている間に〔も〕、同様に、村落にいる間に〔も〕、街道に行っている間に〔も〕、	なし	なし	なし
⑦、家にいる間にも、その家より出ている間に〔も〕、 また、阿蘭若にいる間にも、〔彼らは彼に〕諸々の不快を感じさせる言葉を話しかける。	なし	なし	なし
⑧、このような害されたことが五百年間に続いていた。 罵詈と脅かしをするために、〔彼らは〕常に、相続的に〔彼を〕付き纏っていた。	なし	なし	なし
⑨、そうではあるが、私には憎悪の心が一つさえもない。 私は有する慈を一切世間に遍満して修行する。	なし	なし	なし
⑩、また、その時に、私には〔次の〕考えがあった。 〔それは〕これら〔修行〕によって、衆生たちの本性を柔和と淳良にするのである。	なし	なし	なし
⑪、また、私は単なる善男子たち〔のために〕修行するのではなく、 教化し難い衆生たち、まさに〔彼らを〕私は涅槃に導きたい。	なし	なし	なし
⑫、そのような最上の清浄行が無量劫間に〔行われた〕、なぜならば、 一切世間の有情に利益と安楽をするためであるから。	なし	なし	なし
⑬、貪と嗔によって燃えられていて、愚痴の焼きによって縛られていて、困惑して いて恐怖の中に沈んでいて苦しんでいる有情を知ってから、	なし	なし	なし
⑭、彼は…七日間断食をし、 有情の利益と安楽のために、諸加行によって、勤行し…	なし	なし	なし
⑮、修行の最後の時に、命が尽きた根〔感官〕と繋がれた〔勝者〕が一口だけ肉を手に入った。(MS83a8-83b1)	なし	なし	なし
⑯、苦しみに陥っている或る人が彼に 近づいて、こう言った。「あなたは私に一口の肉を与えなさい」。	なし	なし	なし

⑰、また、或る人は「私に一口の肉を与えようとする者、その者のすべての善根を私は残さずに滅して、	なし	なし	なし
⑱、「彼という衆生が千の大自在者である勝者を避け、〔彼という〕人が百千劫間に悪道で苦しめられ、	なし	なし	なし
⑲、「一切の功德が失われ、天上の安樂も失われ、苦難と災厄に陥り、恒久に貧しくなる」と。	なし	なし	なし
⑳、その時に、安樂を与える菩薩はその人にこう言った。「おお！〔以上言った〕諸々の損が聞かれた、	なし	なし	なし
㉑、「あなたはほんの少しの間さえも、これ〔一口の肉〕を〔食べたことがない〕、一劫程の長い間は言うまでもない。一口程の〔肉〕を食べて安樂と幸福が生じるであろう」と。	なし	なし	なし
㉒、彼は「私は幸福を手に入れたい、幸福が得られたことができない」と。言われた損失〔を受けても〕菩薩は〔その〕人に施す。	なし	なし	なし
㉓、また、それを施して彼〔菩薩〕には発心があった。「私には苦があれ！こ〔の人〕には一切の幸福があれ！」と。	なし	なし	なし
㉔、衆生たちは…毒〕箭の如く五趣にいて、私にとって、それらの衆生たちが諸苦から解放されるべきである。	なし	なし	なし
㉕、〔衆生たちは〕四瀑流によって得られたもの〔の中〕に住んでいて庇護がない。暗黒な溝と泥沼のような我想到に沈んだ。	なし	なし	なし
㉖、また、自分の幸福に求めなく有情に利益と安樂をすることを求めるというようなことができて偉大な精神をもつ菩薩、	なし	なし	なし
㉗、彼は従者たちに伴われた魔を降伏しても、〔歩みを〕中止しない、無上最勝菩提を獲得するために乱されない。	なし	なし	なし
㉘、私には怨恨と高慢と尊大と嫉妬がない、この最上菩提のために、昔から …〔衆生たちに〕恐怖させること〔をしない〕。	なし	なし	なし
㉙、忍辱力は諸慈心の宮殿に入るものであり、悲と喜を得るものであり、一切の煩惱を観察するものである。(MS83b4)	なし	なし	なし

次に、「慈悲喜捨品」では、梵文写本にのみ存在する内容は二箇所ある。一つは慈 (maitrī) について説く内容中の一箇所であり、さらに一つは捨 (upekṣā) について説く内容中の一箇所である。それを以下の表で示す。

慈悲喜捨品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
nirāmiṣapuṇyasambhāropacitā (MS55a1) (〔慈は〕肉欲がなく、福德の集積によって積み重ねたものである。)	なし	なし	なし
śuśrūṣuṣv aśuśrūṣuṣv(read śuśrū{ṣu}ṣv aśuśrūṣuṣv?) anadhivāsanatā (MS57b1-2) (〔捨は〕聞こうと欲しいことと聞こうと欲しくないことに對して執着しないのである。)	なし	なし	なし

次に、「静慮波羅蜜多品」では、菩薩の神通とは何か、智慧とは何かが説かれている内容中、直前の内容を重複した箇所がある。その箇所の内容は梵文写本にのみ存在する⁽²⁹⁾。その内容は以下の表で示す。

静慮波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
yad rūpābhāṣeṣu kṣayadharṃatayā jñānaṃ na ca sāṅskātkriyā idam ucyate te jñānaṃ punar aparaṃ śāriputra yat sarvaśabdāvabhāṣaṃ śrīṇṇīyam ucyate bhijñā (MS112a5-6) (諸色の顯示において、滅の本質を了知しても現証しないこと、これが智慧と呼ばれる。その他、舍利弗よ！一切声の顯示を聞くこと、これが神通と呼ばれる。)	なし	なし	なし

最後に、「大自在天授記品」の最後に、即ち、本経の末尾に帰敬文がある。その帰敬文の内容が梵文写本にしか存在しない。その内容は以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵文訳
namaḥ sarvajñāya namo bhagavate vītarāgāya namaḥ sarvabuddhabodhisa[...] (MS142a3) (一切智のために、帰命する。離欲者である世尊のために、帰命する。一切仏・菩薩 [...のために]、帰命する。)	なし	なし	なし

以上、第三「菩薩観察品」、第五「慈悲喜捨品」、第八「忍辱波羅蜜多品」、第十「静慮波羅蜜多品」、第十二「大自在天授記品」の中、三訳本に存在しなくて梵文写本にのみ存在する内容があることから、このボタラ宮に保存されている梵文写本は、玄奘訳が使った梵文原本と法護等訳が使った梵文原本と蔵文訳が使った梵文原本とは系統を異にする異本であることが推測される。

3. 異同

(1) 前四品、第十一品、第十二品における異同⁽³⁰⁾

『菩薩藏經』の四本は大凡の対応が認められる。しかし全体を通して、完全に合致するわけではない。ここでは、『菩薩藏經』の前四品、第十一品、第十二品を取り上げて、それら六品における諸異同から、梵漢蔵四本間の関係を検討する。諸異同の傾向をまとめると次の表のようになる。

異同対照表						
		梵文写本	玄奘訳	法護等訳	蔵文訳	件数
第一品	表 1	×	○	○	○	3
	表 2	×	○	×	×	1
	表 3	○	○	×	○	3
第二品	表 4	×	○	○	○	1
第三品	表 5	○	×	×	×	1
第四品	表 6	○	○	×	○	7
	表 7	×	○	×	×	3
	表 8	×	○	○	○	9
第十一品	表 9	×	○	○	○	4
	表 10	×	○	×	×	9
	表 11	○	○	×	○	3
第十二品	表 12	×	○	○	○	1
	表 13	×	○	×	×	4
	表 14	○	○	×	○	12

次に以上の六品を一品ずつ紹介したい。

第一「在家者品 (Gṛhapati-parivarta)」⁽³¹⁾の異同は凡そ、三系統に分類できる。それぞれを一例ずつ紹介する。

まず、表 1 の系統を例示したいと思う。ここは、世尊が在家者に自分の出家の原因を九つ挙げて述べる文脈で、十不善業道を説く箇所である。しかし、その内容が梵文写本でのみ欠落している⁽³²⁾。以下の表で示す。

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

在家者品			
梵文字本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
bhava iti kim* yad idam kāmabhaḥvo rūpabhaṇṇā rūpyabhaṇṇa ca ayam ucyate bhavaḥ (MS8b4) (有とは何か。すなわち、欲〔界〕の有であり、 色〔界〕の有であり、無色〔界〕の有である。 これが有と呼ばれる。)	云何爲有。所謂欲有 色有。及無色有。福 及非福不動業等。是 名爲有。 (T11.199c29-200a2)	何名爲有。謂欲有 色有無色有。此名 有。 (T11.786a26-27)	རྒྱལ་ཞེས་ཐུག་པ་ཁ་ཞེས་པ་འདི་ནི་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལ་ རྒྱལ་པ་པ་དང་། ལྷན་པ་པ་དང་། ལྷན་པ་པ་དང་། ལྷན་པ་ རྒྱལ་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ལྷན་པ་ <P 293a5-6c, D 267b3, 1121a1-2>

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

— 56 —

<p>になる。何かから解脱になるのか、我に対する執着から解脱になる、衆生に対する執着から解脱になる、命に対する執着から解脱になる、補特伽羅に対する執着から解脱になる、断に対する執着から解脱になる、常に対する執着から解脱になる、分別から解脱になる。彼は分別しない。分別をしなかったの、分別することもない、分別しないこともない。何かを分別しないか。我というのを分別しない、我所というのを分別しない。彼は〔我と我所を〕減少したり、増加しなくしたり、捨てたり、取らなくしたりする。除却してから、寂滅に達する、解脱になる、出離になる、救われたことになる、分離されたことになる。何かから出離になるのか、一切苦から出離になる。在家者たちよ！出離を希求するあなたたちは、決して一つの法をさえも取らないべきである。それは何故か。在家者たちよ！取から有 (bhava) が生じ、無取から〔有が生じ〕ないから。(MS11a8-11b5)</p>	<p>解脱。何處解脱。於我執所而得解脱。有情壽命乃至於一切分別執所。而得解脱。行者若能於執解脱則不分別。若不分別。則非分別非不分別。何等不分別。謂不分別我及我所。行者爾時離散不積。捨而不取。捨故寂滅。解脱除遣。最勝解脱。離諸繫縛。於何除遣。一切苦處而得除遣。汝諸長者。若求出離。勿於一法而生取著。何以故。若有取著則有怖畏。若無著者則無怖畏。(T11. 201c7-27)</p>	<p>ཐུང་ནི་ནི་ལྟ་བུ་བཟུལ་ཐབས་ཅད་ལས་བྱུང་ངོ་། ཁྱིམ་བདག་བྱིད་རྒྱམས་འབྱུང་བར་འདོད་ན། ཚེས་གང་ཡང་ཐུང་བར་མི་བྱུང་། དེ་ཅིའི་བྱིར་ཞིན་ན། ཁྱིམ་བདག་རྒྱམས་ལེན་པས་ནི་ཐུང་བར་འགྱུར་གྱི། མི་ལེན་པས་ནི། མ་ཡིན་ནོ། < P 12298b1-299a3; D 12272a5-b6; H29a4-H30a3></p>
---	---	--

第二「金毘羅葉叉品」の異同は表4に挙げた一系統のみである。ここでは、それは仏陀になると発心した山という名前の金毘羅の息子が世尊の授記を聞いてから、世尊のこれから鷲峯 (grddhrakūṭa) に行くことを知ってから、その世尊の鷲峯に行く道を種々の掃除と飾りを行おうと思っているという文脈の中にある「今私は如来のところで少し善根を植えべきである」という箇所である。この箇所は梵文写本にないが、他の三本にはある。次の表でその異同内容を示す。

金毘羅葉叉品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	我當復應於如來所殖少善根。(T11. 204b26)	我今宜應於世尊所少植善根。(T11. 791a12-13)	བདག་གིས་བཞོམ་ཞུན་འདས་པ་དཀོན་ཆ་བརྒྱ་ཐོན་པོ་ཞིག་བཟུང་ངོ་། <P 12304b7; D 12278b2-3; H 38b5-6>

第三「菩薩觀察品」の異同も表5の一系統のみである。その内容は次の表で示す。

菩薩觀察品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
anupalipṭāś ca bhavanti lokadharmair (MS16b5) (世間諸法によって汚されることのない者となる。)			

第四「如来不思議品」の異同は凡そ三系統に分類できる。次はそれぞれを一例ずつ紹介する。まず、表6の系統を例示したい。当該箇所は、如来の智が不思議であると説かれている文脈で、十方の世界の水の中に、一切塵を作っても、勝者に示されば、勝者はそれらすべての塵を知るという喩えを作る偈文の箇所である。しかし、その偈文は法護等訳にのみ存在しない。その例示する内容は次の表で示す。また、それと同傾向の異同が他に六例は存在する。

如來不思議品			
梵文本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	<p>舍利子。如來種種根智。不可思議無邊無際與虛空等。若有欲求如來諸根智力邊際者。不異有人求虛空際。諸菩薩摩訶薩聞是根力如虛空已。信受諦奉清淨無疑。倍復踴躍深生歡喜發希奇想。(T11. 219b11-15)</p>		

また、それと同傾向の異同が他に八例は存在する。

如來不思議品			
梵文寫本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	舍利子。由不稱理作意爲因無明爲緣。 令諸有情發起雜染。(T11. 220b23-24)	謂即一切衆生諸雜染中。 不如理作意是因。無明是 緣。(T11. 807a21-22)	མིམས་ནས་མཉམས་འདུ་ཀྱི་ཀུན་ནས་ཉེར་མཛེས་པའི་རྒྱ་ནི། ཚུལ་བཟིན་མ་ཡིན་པ་ཡིད་པ་འདྲེད་པའི་མིམས་ནས་མཉམས་ འདུ་ཀྱི་ཀུན་ནས་ཉེར་མཛེས་པའི་རྒྱ་ནི། མ་ཇིག་པམ་ལ། <P 26a1-2; D གྲ་23a5-6; H 98a3-4>

次に、表 9 の系統を例示したい。ここは、般若が一切有為法と共に住まないと説かれている文脈で、般若は業障と、煩惱法障と、見障と、報障と、智障と、相続的な習気とは共に住まないという箇所である。しかし、その内容が、梵文写本のみ存在しない。表で示すと、次のようになる。

般若波羅蜜多品			
梵文本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	如是般若不與業障同止。不與煩惱障法障見障報障 智障同止。乃至不與一切隨俗習氣而共同止。 (T11. 2996b10-12)	悉不共住。又於業障煩惱障法障見障報障智障。乃至一切相續習氣。悉不共住 (T11. 871b14-15)	ལས་ཀྱི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཉེན་མེད་པའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཚིག་ཀྱི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཐུ་ལའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། རྒྱལ་པོ་ཐུག་པའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། བླ་མའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཐུག་པ་ལ་དང་། བླ་མའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཐུག་པའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། ཐུག་པའི་ཐུག་པ་ལ་དང་། < P 186b5-6; D 頁 164b-6; 7. II 316a2-5>

また、それと同傾向の異同が他に三例は存在する。

次に、表10の系統を以下の表で例示する。ここは、義を依所とし、文を依所としない、智を依所とし、識を依所としない、了義の経を依所とし、不了義の経を依所としない、法性を依所とし、補特伽羅を依所としないという菩薩の四つの依所に対する善巧が説かれている文脈で、なぜ菩薩摩訶薩が智を依所とし、識を依所としないのかの説かれている箇所である。しかし、その内容は玄奘訳にのみ存在する。表で示すと、次のようである。

般若波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	復次舍利子。云何菩薩摩訶薩。依趣於智不依趣識。舍利子。菩薩摩訶薩。依般若波羅蜜多故。善巧了知諸有言教數取趣義。是名爲識此不應依。諸有言教如法性義。即是於智此應依趣。(T11.304a6-10)		

また、それと同傾向の異同が他に八例は存在する。

次に、表11の系統を表で例示したいと思う。当該箇所は、本品の品末の偈文で後ろから第二番目の偈文中の「そして常に怠惰しない」という箇所である。その内容は法護等訳にのみ存在しない。以下の表で示す。

般若波羅蜜多品			
梵文写本	玄奘訳本	法護等訳	藏文訳
ca sadā bhoti atandrito (MS133b7) (そして常に怠惰しない)	於彼昏沈常遠離 (T11.315c13)		ཉུག་ཏུ་གཤམ་པ་ལྟར་ལྷོ་ལྷོ་ ། < P 金186b5-6; D 金191a1; H 358b3>

また、それと同傾向の異同が他に二例は存在する。

第十二「大自在天授記品」の異同は凡そ三系統に分類できる。ここでもそれぞれを一例ずつ紹介したい。

まず、表12の系統を示したい。ここは、放光 (dipaṃkara) 如来を供養するために、雲 (megha) という名前の少年が七本の青蓮華を持つ少女から蓮華を買おうとした時、彼女に自分が昔に如来に布施したことを話す文脈で、玄奘訳の「内宮妃后」と相当内容である箇所である。しかし、その内容が梵文写本にのみ存在しない。以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳本	法護等訳	藏文訳
	内宮妃后(T11.318b18)	嫫女(T11.883a29)	ལྷོ་< P 金224a8; D 金197a7; H 368a3>

また、それと同傾向の異同が他に存在しない。

次に、表13の系統を例示したい。当該箇所は、雲という名前の少年は七つの蓮華を持つ少女から蓮華を買ってから放光如来に散華して供養する時に、百の天子たちも虚空から天上の諸々の蓮華と諸々の天上の旃檀香 (candana) によって放光如来に散華して供養する文脈で、玄奘訳の「拘翼陀花奔荼利花」と相当内容である箇所である。しかし、その内容は玄奘訳にのみ存在する。次の表で示す。

また、それと同傾向の異同は他に三例が存在する。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
	拘貨陀花奔荼利花 (T11. 318c17)		

最後に、表16の系統を例示したいと思う。ここは、ナラダッタ (Naradatta) という名前の長者の息子が世尊の前から菩薩藏法門、諸仏と諸菩薩の功德を聞いてから、偈文で自分の発心を述べる文脈で、「そして、小さく劣った乗である声聞乗を放棄してから、如来よ！あなた様のように私はそのようになりたい」という内容を説く一偈の箇所である。しかし、この一偈は法護訳にのみ存在しない。以下の表で示す。

大自在天授記品			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
śrāvakayānaṃ ca varjitvā hīnaṃ yānaṃ kaṇiṃyaṣaṃ bhaviṣye īdṛśaś caiva yādṛśo si tathāgata (MS139b1) (そして、小さく劣った乗である声聞乗を放棄してから、 如来よ！あなた様のように私はそのようになりたい)	遠彼聲聞乗 兼濟下乗者 願我於來世 如今日世尊 (T11. 320a12 -13)		ཐུག་པ་ཐུང་དུ་ཐུག་པ་དཔུན། ། ཉན་ཐོས་ཐུག་པ་ཐུང་སྟེ་ནི། ། རི་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐུང་ཅི་འདྲ། ། རི་འདྲ་ཞིན་ཉན་ཐོས་པར་ཤིག། < P 228b5; D 21a1 ; H 373b4 >

また、それと同傾向の異同が他に十一例は存在する。

以上の14項の表から検討した結果、次の四点が明らかとなる。1) 梵文写本、玄奘訳、法護等訳、藏文訳の四本はそれぞれ完全に一致せず、別本である。2) 今回の六品に関しては、法護等訳にのみ存在する、藏文訳にのみ存在するという異同はない。3) 一方、玄奘訳にのみ存在するという異同が複数存在する。4) 梵文写本にのみ存在するという異同は一件しかない。

以上の四点を踏まえれば、四本中、少なくとも法護等訳と藏文訳は近い系統に属するとと言えるであろう。梵文写本も法護等訳と藏文訳の二本に近い系統に属するものであると考えられる。

また、梵文写本、法護等訳、藏文訳の三本は近い系統に属するものであることが、玄奘訳「般若波羅蜜多品」相当箇所における道法（分）善巧の順序と、玄奘訳「大自在天授記品」相当箇所における四摂法中の布施内容に対する検討からも分かる。

(2) 道法（分）善巧の順序と四摂法中の布施

玄奘訳「般若波羅蜜多品」相当箇所における道法（分）善巧内容の順序は四本では異なる。梵文写本・法護等訳・藏文訳の三本は四念処→七覚支→八正道→奢摩他と毘鉢舍那→四正勝（断/勝/願）→五根→五力という順序で一致する。ところが、玄奘訳本では四念処→四正勝（勤/断）→五根→五力→七覚支→八正道→奢摩他と毘鉢舍那という順序で説かれていて、梵文写本、法護等訳、藏文訳とは一致しない。それを表で示すと、次のようになる。

道法(分) 善巧の説示順序			
梵文写本	法護訳	藏文訳	玄奘訳
1 四念処 MS126a7-128b5	1 四念処 T11.875c28-877b19	1 四念処 P ㄱ200b8-205b5; D ㄱ176b7-181a4; H 335a5-342a3	1 四念処 T11.307b4-309c4
2 七覺支 MS128b5-129a5	2 七覺支 T11.877b-877c18	2 七覺支 P ㄱ205b5-207a1; D ㄱ181a4-182a4; H 342a3-343b5	2 四正勝(勤・断) T11.309c13-310b16
3 八正道 MS129a5-b5	3 八正道 T11.877c18-878a15	3 八正道 P ㄱ207a1-208a4; D ㄱ182a4-183a5; H 343b5-345a7	3 五根 T11.310b17-c22
4 奢摩他と毘鉢舍那 MS129b5-130a4	4 奢摩他と毘鉢舍那 T11.878a15-b10	4 奢摩他と毘鉢舍那 P ㄱ208a4-209a4; D ㄱ183a5-184a3; H 345a7-346b4	4 五力 T11.310c23-311b10
5 四正勤(断) MS130a4-b6	5 四正勤(勤・断) T11.878b10-c15	5 四正勤(断) P ㄱ209a4-210b2; D ㄱ184a3-185a6; H 346b4-348b4	5 七覺支 T11.311b11-311c29
6 五根 MS130b6-131a6	6 五根 T11.878c16-879a7	6 五根 P ㄱ210b2-211a5; D ㄱ185a6-185b7; H 348b4-349b3	6 八正道 T11.312a1-312b26
7 五力 MS131a6-b3	7 五力 T11.879a7-b5	7 五力 P ㄱ211a5-212a4; D ㄱ185b7-186b5; H 349b3-351a1	7 奢摩他と毘鉢舍那 T11.312b27-313a9

また、玄奘訳「大自在天授記品」の相当箇所では、布施、愛語、利行、同事という四摂法が説かれている。その中の布施について、梵文写本、法護等訳と藏文訳では財施と無畏施と法施という三つの布施が説かれている。玄奘訳では財施と法施という二つの布施しか説かれていない。次の表で示す。

四摂法中の布施			
梵文写本	法護等訳	藏文訳	玄奘訳
tatra katamad dānaṃ yad idam āmiśadānaṃ (財施) abhayadānaṃ (無畏施) dharma[dha]dānaṃ (法施) idam ucyate dānaṃ (MS134a1) (その中、布施とは何か。すなわち、財 の布施と無畏の布施と法の布施である。こ れが布施と呼ばれる。)	云何布施。謂財施法施 及無畏施。 (T11.881a28-29)	དེ་ལ་ཐུན་པ་གང་ཞིན་ལྟར་ རེ་ཞུ་གྱིན་པ་ ཐུན་ཞིན་ཐུན་པ་དང་། (財施) ཐུན་ཞིན་ཐུན་པ་ལྟར་དང་། (無畏施) ཐུན་ཞིན་པ་ལྟར་ (法施) རེ་ནི་ཐུན་པ་ལོ། <P ㄱ217b4-5; D ㄱ191b4; H 358b7-359a1>	云何名爲如是攝法。童子 所言 施者具有二種。一者財施。二者 法施。是爲布施。(T11.316a7-8)

以上、道法(分) 善巧の順序と四摂法中の布施から、玄奘訳が使った梵文原本は、ポタラ宮に保存されている梵文写本、法護等訳、藏文訳本の三者とはかなり遠い関係にあることが分かる。また、玄奘訳「大自在天授記品」の相当箇所における四摂法について、四本の中、説かれている布施の数から見れば、玄奘訳が使った梵文原本は、ポタラ宮に保存されている梵文写本、法護等訳が使った梵文原本、藏文訳本が使った梵文原本より古層に属するものではないかとも考えられる。

(3) 「四無量品」の末尾における六波羅蜜多に対する列挙

また、本経の「慈悲喜捨品」の末尾に、慈悲喜捨を既に詳細に開示したが、次は六波羅蜜多を詳細に開示するという文脈がある。その中、六波羅蜜多に対する列挙がある。その列挙の内容は梵文写本と法護等訳にのみ存在し、他の二本には存在しない。それを次の表で示す。

「慈悲喜捨品」における六波羅蜜多に対する列举			
梵文写本	玄奘訳	法護等訳	藏文訳
katamāḥ ṣaṭ* tadyathā dānapāramitā śīlapāramitā kṣāntipāramitā virīyapāramitā ' dhyānapāramitā prajñāpāramitā imāḥ ṣaṭ pāramitāḥ soddeṣaṃ sanirdeṣaṃ vistareṇa samprakāśayati(The sentence ṣaṭ ca [...] samprakāśayati does not occur in Tib.and Ch.) (MS58a1-2) (六とは何でしょうか。すなわち、布施波羅蜜多であり、持戒波羅蜜多であり、忍辱波羅蜜多であり、精進波羅蜜多であり、禪定波羅蜜多であり、智慧波羅蜜多である。これらの六波羅蜜多を陳述と解説で詳細に開示する。)		何等爲六。所謂布施波羅蜜多。持戒波羅蜜多。忍辱波羅蜜多。精進波羅蜜多。禪定波羅蜜多。勝慧波羅蜜多。如是宣說諸波羅蜜多。(T11. 822b4-7)	

したがって、このように梵文写本と法護等訳にのみ存在する内容があることから、四本の中、梵文写本、法護等が使った梵文原本は他の二訳が使った梵文原本より新層に属するものではないかとも考えられるであろう。また、上文の「2. 梵文写本にのみ存在する内容」中に既に述べたように、本経の「菩薩觀察品」、「慈悲喜捨品」、「忍辱波羅蜜多品」、「静慮波羅蜜多品」、「大自在天授記品」中、梵文写本にのみ存在するという内容があるので、このポタラ宮に保存されている梵文写本は法護等訳が使った梵文原本よりもっと新層に属するものではないかとも考えられるであろう。

故に、四本の中、一番新しいのはこのポタラ宮に保存されている梵文写本であると考えられる。

四、結論

以上の検討結果、四本のそれぞれの経典名から、本経は「菩薩藏」を説く経典であることが見て取れる。また、梵文写本にのみ存在する内容があること、前四品、第十一品、第十二品における異同から、四本は系統を異にする異本であることが分かる。さらに四種の異本の中で、ポタラ宮に保存されている梵文写本と法護等訳が使った梵文原文と藏文訳が使った梵文原文の三本は近い系統に属するものであることが推測される。その他、玄奘訳が使った梵文原文は以上の三本とはかなり遠い関係があることも分かる。また、玄奘三蔵が翻訳に使用した梵文原典は他の三本より古層に属するものも推測されるであろう。同時に、「慈悲喜捨品」中、梵文写本と法護等訳にのみ存在する内容があることから、梵文写本、法護等訳が使った梵文原本は他の二訳が使った梵文原本より新層に属するものであると考えられる。また、「菩薩觀察品」等の五品中、梵文写本にのみ存在する内容があることから、このポタラ宮に保存されている梵文写本は法護等訳が使った梵文原本よりもっと新層に属するものであるとも考えられる。

〔注〕

- (1) 宝積部の第12経に相当するこの『菩薩藏經 (Bodhisattvapiṭaka-sūtra)』の梵文写本はラサのポタラ宮に保存されている。
- (2) T55. 555c5-6

- (3) 「『大菩薩藏經』二十卷、四百一十紙、貞觀年玄奘於弘福寺譯」(T55.182a9-10)
- (4) 「『大菩薩藏經』二十卷、四百一十紙、唐貞觀年玄奘於京師弘福寺譯」(T55. 286b17-18)
- (5) 「帝曰：自法師行後造弘福寺、其處雖小、禪院虛靜、可爲翻譯。……〔法師〕既承明命返迹京師。……其年〔貞觀十九年〕五月、創開翻譯『大菩薩藏經』二十卷。余爲執筆、并刪綴詞理。其經廣解六度四攝十力四畏三十七品諸菩薩行。合十二品。將四百紙」(T50.455a10-19)
- (6) 「以貞觀十九年迴靶。上京見帝于洛。帝大悅即命所將梵本六百五十七部。勅於西京弘福寺翻譯。……到二十二年、已譯之經奉以奏聞。……譯……『大菩薩藏經』一部二十卷」(T55.367a16-b10)
- (7) 「大菩薩藏經一部二十卷四百一十紙右唐貞觀十九年三藏玄奘於西京弘福寺譯。出內典錄」(T55.400a7-a9)
- (8) 慧立、彥悰；T50.252b14-254a10
- (9) 『寺沙門玄奘上表記』, T52. 818a4
- (10) 慧立、彥悰；T50.252b14-254a27
- (11) T50.258a17-a20
- (12) 「從吠舍釐南境、去殑伽河百餘里、到吠多補羅城。得『菩薩藏經』」(T50.236a5-7；吠多補羅城 (śvetapura))
- (13) 「及大寶積。此經都有四十九會。上代譯者摘會別翻、而不終部帙。往者貞觀中、玄奘法師往遊印度、將梵本還。於弘福寺譯『大菩薩藏經』。即是寶積第十二之一會」(T55.570b2-b6)
- (14) 「人道十苦 『菩薩藏經』云。人有十苦之所逼迫。一生苦。二老苦。三病苦。四死苦。五愁苦。六怨苦。七苦受。八憂苦。九病惱。十流轉大苦」(『釈氏要覽』卷中、T54.291c4-c7)
- (15) 「唐世人主如太宗之聰明英武。……稱皇帝菩薩戒弟子。及玄奘法師之譯經也。則爲之序。而名之曰御製三藏聖教序。覽『菩薩藏經』。愛其祠旨 微妙也。則詔皇太子撰『菩薩藏經』序」(『三教平心論』卷下、T52.788a15-21)
- (16) 「『大宝積經』、一百二十卷、單重合譯、神龍二年創首、先天二年功畢」(『開元釋教錄』卷第九、T55.569b5)
- (17) 智旭 <1599-1655年>、『嘉興大藏經』第三十一卷,1004頁。
- (18) 「『菩薩藏經』合二十卷。竺法護譯也。『辨中邊論』引此經十七卷。與今文大同也。已上有人考。基辨詳有人考云。有人云竺・法護譯二十卷者。檢明藏目錄。云『佛說大乘菩薩藏正法經』二十卷者。舊作四十卷。惟淨譯。後竺・法護等校譯作二十卷者現存。『寶積經』中與十二「菩薩藏會」同本異譯。予對檢如有人云。無別名『菩薩藏經』者。由此『演祕』所云亦別本歟。予閱『寶積經』「菩薩藏會」。如秋篠云。此皆緣彼智。又『演祕』中云『辨中邊論』與『菩薩藏經』說意相違。恐非歟。章主意非經論說意別」(『大乘法苑義林章師子頻伸鈔』第十六卷、T71.764c28-765a4)
- (19) 「『大乘菩薩藏正法經』宋・西天三藏賜紫沙門法護等譯」(T67. 88a5)
- (20) 第十品以降、『菩薩藏經』の品の区分は梵漢藏の四本で異なる。本稿では、検討の便宜上、玄

契訳に従い、十二品の区分を用いる。

- (21) 玄奘は「試験菩薩品第三」と名付け、法護と惟浄は「菩薩觀察品第三」と名付ける。藏文訳本は byang chub sems dpa' brtag pa zhes bya ba'i le'u ste/ gsum pa// と名付ける。
- (22) 玄奘は「四無量品第五」と名付ける、惟浄は「慈悲喜捨品第五」と名付ける、藏文訳本は byams pa dang/ snying rje dang/ dag' ba dang/ btang snyoms kyi le'u ste/ lang pa// と名付ける。
- (23) 梵文写本は kṣāntipāramtā parivarttānām āṣṭamaḥ || と名付け、玄奘訳は「辱底波羅蜜多品第八」と名付け、法護等訳は「忍辱波羅蜜多品第八」と名付け、藏文訳は bzod pa'i pha rol tu phyin pa'i le'u ste/ brgyad pa// と名付ける。
- (24) 梵文写本は dhyānapāramitāparivartto nāma daśamaḥ と名付け、玄奘訳は「靜慮波羅蜜多品第十」と名付け、法護等訳は「禪定波羅蜜多品第十」と名付け、藏文訳は bsam gtan gyi pha rol tu phyin pa'i le'u ste/ bcu pa// と名付ける。
- (25) 玄奘は「大自在天授記品第十二」と名付けるが、梵文写本、法護等訳本、藏文訳本は品名を立てない。
- (26) 表中①の散文 sacec……(MS83a2) から㊟の偈文 kṣāntibala upeto maitracittarṣabhāṃs ca ' karuṇamuditalābhī sarvakleśām apekṣaḥ || (MS83b4) までの内容は梵文写本にしか存在しないことが梵文写本の校訂者によって梵文写本のテキスト中で既に指摘されている。
- (27) ここでは、梵文写本の原文を示さず、その訳だけを示す。
- (28) ここの「我々」は梵文写本テキスト中の iyaṃ を vayam の誤写として訳されたのである。
- (29) 梵文写本テキストにおいて、その直前の内容を重複した箇所が法護等訳に存在しないことは既に指摘されている。
- (30) 『印度学仏教学研究』第65巻第1号に投稿したものの中に前四品、第十一品、第十二品の異同についての詳細は紹介していない。ここではその異同の詳細を紹介する。
- (31) 法護と惟浄は「長者賢護品第一」と名付ける、玄奘は「開化長者品第一」と名付ける、藏文訳本は khyim bdag gi le'u zhes bya ste/ dang po// と名付ける。
- (32) その内容が梵文写本でのみ欠落していることは本梵文テキストの校訂者によって既に指摘されている。
- (33) ここでも、梵文写本の原文を示さず、その訳だけを示す。

（どうほん 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員：松田 和信 教授）

2016年9月29日受理